

そして、昭和34年長野市の工場誘致条例により、本社及び工場を長野へ移転しました。

雪深い飯山から長野へ移ったことは、その後の飛躍には良かったのではないかと思います。

片桐匡さんの紹介で、グラフィックデザイナーの亀倉雄策先生にマークのデザインを依頼することになりました。この先生は、東京オリンピックや札幌オリンピックのメインポスターのデザインをされた方ですし、今のNTTの丸いマークもデザインされた先生でもあります。この先生は、大変スキーの好きな先生でして「スキー教わり魔」と言われておりました、スキーの腕前も相当な方です。

この当時は、スキーも大変盛んになりスキーメーカーも増えて、飯山だけでも15社近くあり、北海道だけでも10社はあったのではないかと思います。

35年から40年にかけては、スキー工業界の加盟数が75社もありました。

その中でも、スキーメーカーは約42から43社あったといわれています。そして昭和39年は、日本にとりましても、スキー界にとりましても、小賀坂にとりましても大きな転換期でございました。

グラススキーという物が、昭和32年頃から新潟にあります有沢製作所が研究を始めており、製品として出たのは36年頃でございます。私どもが商品化したのは、昭和39年でございます。この年は東京オリンピックが開催された年であり、また、その10日前には東海道新幹線が開業し、その後の日本経済発展の大きな支えになっております。

スキー界にとりましては、第1回全日本デモンストレーター選考会が蔵王で開催され、その時初めて日本のスキー技術を発表するデモンストレーターを派遣する選考会も兼ねていたと聞いております。インタースキーに出場するデモンストレーターは、どんなスキーを使うんだということになり、スキー工業会に加盟するメーカーがそれぞれ希望するところには、スキーを提供してデモの皆さんに履いてもらい選択してもらうことになりましたが、最終的には5名の方に私共のスキーを選んでいただきました。

このデモ選の開催、インタースキーへの参加がその後の日本のスキー技術を高めるのに大変大きな役割を果たし、スキー普及発展に大いに寄与したと思っております。

よく先代が話していたんですが、グラススキーを作って出荷したが、小売店からみな返品された。「こんな腰抜けのスキーは使えない」と言われたそうです。

それまでの木のスキーというのは、大体使っているうちにへたってきますから、最初しっかり硬いスキーを作る。そして、それを使いこんでいくうちにちょうど良くなる。しばらく使っているうちにバンドが緩んできてしまう。

このような経過をたどるわけですが、スキー作りにおいても、今までの木のスキーの感覚でグラスファイバーを使ったスキー作りをしますと、硬いままで何時まで経ってもへたることはありません。私共のスキーは、木のスキーが丁度良くなった時に標準を合わせて、グラスファイバーで強化したスキーを作ったものですから最初から柔らかく、小売業者にしてみればこんなスキーで大丈夫なのか、ということになったようでございます。

ところが、インタースキーからデモの方々が無視され、いったいどんなスキーを使ったんだということになって「小賀坂だよ」ということから、改めて注文をいただいて納品したということ为先代が良く申しておりました。スキーの本質をしっかりとらえた物づくりを、この当時からしていたということでございます。

昭和41年には、スチールファイバーで0.08の細いピアノ線をグラスファイバーに混ぜて、板を作っ

